

小町伝説の母胎——古今集

明川忠夫

一

小野小町は著名な歌人でありながら、殆んど何もわかっていない。

小町の出自の古い記録としては、藤原朝臣仲実（一〇五七—一一一

八）編纂の『古今集目録』がある。

小町十八首卷下一首。物名二首。恋二、三首。同三、五首。同四、二首。同五、三首。雑下二首。俳諧一首。出羽国郡司女。

或言母衣通姫云々。号ニ比右姫云々。

目録の成立期の平安中期という点、『古今集』の小町の歌十八首を核として、小町伝説が一人歩きしていく時期である。例えば、同時代の『袋草子』『江次第』には、小町あなめ伝説が記載されている。『小町集』も十八首を核として増補され、その成立は千年前後といわれている。従って、この目録はあてにならない。

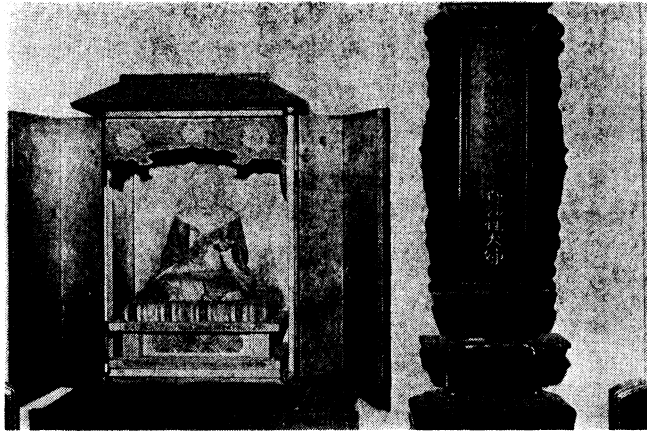
「或言母衣通姫」は、古今集序文の「小野小町は、古の衣通姫の

小町伝説の母胎——古今集

流れなり」からきた作り事に違いなし、出羽郡司の女も小野氏と出羽、陸奥との結びつきから、小町と結びついたものと思われる。小野氏略系図^②、小野氏系図に小町の父を出羽守、小野良真としたのも、この目録を資料にしたため、その結果、正史にない良真をつくったのであろう。小町姪女説^③、仁明帝更衣説も同様である。「号比右姫」から小町を小野峯守の孫娘即ち篁の子とする説もあるが推定の域をでない。

このように小町の出自は、まったく謎につつまれている。『古今集』成立期において、すでに不明の人であったと思われる。残されたのは、小町の多くの虚像と実像である。そして、今やどこまでが虚像で、どこまでが実像なのか、わからなくなってしまった。

しかし、どんなに虚像と実像が混和しても、小町的なものは連綿として続いているはずである。美人の代名詞の小町、好色の女の小



比丘尼姿の小町像と小町の戒名 江戸末期？
京都府・丹後大宮五十河小野山妙性寺藏

町、橋慢の女

の小町、零落

放浪する小町

などの小町像

は、いったい

どこから生ま

れたのか。多

彩な小町像は、

後になってさ

まざまな派生

を見せ、多く

の小町を生ん

でゆく。その

母胎は小町の

歌にあるよう

である。小町

の感想にヒントを得ながら考えてみたい。

二

次の一口感想は、十八首を高三の生徒(男)に教えた後、クラス(45名)で書かせたものである。歌は生徒の発表形式をとらせたので、参考書による影響は否めない。しかし、事前に好色、橋慢、美人とかいったことは教えていないので、念のために書きそえておく。

(ア) ひかえ目で女らしさ、純情で、繊細な乙女。

(イ) 自我が強くてお高くとまっている。そのくせ恋に溺れると、すべてをかなぐり捨てて、男のもとへ走るというタイプ。

(ウ) 好きなものは好き、嫌いなものは嫌いとはっきりいえる人。清少納言に似ている。きつい面も持っているが、そこに魅力を感じずる。

(エ) 十八首に出てくる男たちは、全部で何人だろうか。ひょっとしたら全部ちがうのではないか。

(オ) 年をとってからの歌は哀れである。中年のひがみがでている。男に左右されやすい小町が哀れである。

(カ) 恋の歌ばかりでうんざりする。よくもこれだけ詠んだものだ。

(キ) 頭が良くて美人であるが、自らのぼせあがる利己的な女である。

には『小町集』があるが、前述したように、『小町集』そのものが小町伝説の一人歩きの際の成立なので、その核となった『古今集』の小町十八首に小町の間人像をさぐってみたい。変りばえせぬ小町論になりそうだが、伝説化される条件とは何であったのかを、生徒

(ク) あまりにも大げさな表現、しらじらしい言葉が多すぎる。女の奥ゆかしさが無い。

(カ) 男にもてる女は本当の恋人がいない場合が多いのではないかと、さみしげな感じは、それを裏書きする。さみしげな小町に心をひかれる。

数少ない小町の歌だけに逆に想像力を刺戟するの、さまたまな小町像を把えているのに驚く。同時に、把えられた小町のイメージが、伝説小町像の多彩さをみごとに把えていることに感心する。

美人ですとは、どこにも歌われていない。角田文衛氏は「花の色はの歌は小町が容姿についてかなり自負してゐたことを暗示」といっておられるが、これは潜在意識としての美人小町観がもたらしたものと思われる。目崎徳衛氏によると、古今集序が小町を「容姿絶妙^くれて比無^なし、其の艶^{うま}しき色衣^{いろえ}より徹^{とほ}りて見^まれり」(『允恭紀』七年)

という衣通姫と比べたので、美人とする観念が何時しか不動のものとなったと述べておられる。たしかに衣通姫の影響は無視できないが、だからといって、小町は美人とは言えないだろう。「小町は衣通姫の流れなり」の「流れ」は、衣通姫の歌の系統、類ということ、美人の衣通姫のような小町を強調していない。衣通姫がなぜ書かれたのかは、古今集序にあげられている衣通姫の歌「わが夫子⁽¹¹¹⁾が鍵をにぎっているようであるが、推定の域をでない。美

表① 生徒の選んだ小町の歌

好きな歌	嫌いな歌
① 思ひつつ……11人	① わびぬれば……8人
② 秋の夜も……6人	② 海人のすむ……4人
③ 限りなき……5人	③ みるめなき……3人

表② 小町の詠歌の引歌順位

① 思ひつつ……6例	例 (蜻蛉、更級、住吉、今鏡、増鏡、石清水、宇治拾、源氏、狭衣、十六夜、松中納言、徒然)
① わびぬれば……6例	例 (源氏、狭衣、十六夜、松中納言、徒然)
③ いとせめて……2例	例 (宇津保、源氏)

(前田善子「小野小町」を参照してつくったもの)

人小町が流布するとするなら、小町の歌から、自然とにじみでてくる美人のイメージがあるはずである。

小町を美人と感じた生徒は、有名な「花の色は」(113)ではなかった。夢の連作六首に惚れこんだ人が、小町に美しさ

を感じているのは興味ぶかい。六首の中で上位順にいうと次の三首である。以下の引用は『古今集』日本古典文学全集・小学館による。

552 思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを

553 うたた寝に恋しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき

657 限りなき思ひのままに夜もこむ夢路をさへに人はとがめじ

これらの歌は、日常「恋しき人」にめったに逢えぬ「絶望的状况」から生まれた恋情である。生徒は歌の中に乙女の純情さ、一途

な慕情、若々しい情熱にほれこみ、ついで、恋人に逢えぬ、はかなしい現実を読みとって彼女に同情し、小町を美化、偶像化してしまうのである。

この見方は貫之に似ている。貫之は古今集序の中で小町を「あはれなるやうにて強からず。いはばよき女のなやめるところあるに似たり」と批評している。貫之は、その例として小町の歌を三首あげているが、その中に「思ひつつ」の歌をあげているのは、注目してよいだろう。他の二首は「色見えで」(977)と「わびぬれば」(938)である。この二首については後述するが、二首からは、うつろひの思想が感じられるので、それが「あはれなる」につながってくるようである。

「よき女」は身分が高い女性とする説。「あはれなる」のあはれにあたる説。美女とする説とがあるが、古今集真名序では「あはれなるやうにて強からず」の序に対し、「艶にして氣力なし」としてゐるので、「あはれなるやう」は「艶」にあたる。艶は「平安時代の漢詩文では艶情、妖艶など魅惑的な美をいう」(『岩波古語辞典』)ので魅惑的な美女または、窪田章一郎氏の「艶にしてあわれな美しさ」^⑩となる。

小町の美人のイメージは、このように歌から感じたようであるからではない。衣通姫から美女を連想したとすれば、小町即美人が

伝説化されてからであろう。少なくとも衣通姫がどういう人であるかを知らぬ人は、美人を想像することは困難である。多くの人が歌の内容を理解し、一つのイメージを描き伝説化するには、歌としてすぐれているばかりでなく歌の平易さからんでくる。夢の連作六首は、その意味で美人という伝説化の条件にあてはまる。表①②で「思ひつつ」が時代を越えて一位になるのも、同様の理由ではなからうか。



佐竹本三十六歌仙絵 小野小町 東京国立博物館蔵

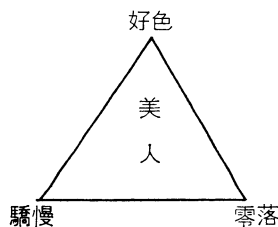
(美女小町が伝説化されてくると、小町の顔を描くのはむづかしい。歌仙絵の代表作家、藤原信実(一一七—一二六五)は、三十六歌仙中、四人の女性は正面から描いているのに、小町は後姿しか描いていないのはおもしろい。信実は伝説化された美女のイメージが、こわれるのを恐れたのではなかったか。若い小町

の正面の像は、恐らく後世に入ってからであろう。

三

小町が好ましい女性と映る人でも、恋の歌の多さ、歌の背後に見えかくれする男の影を想像すると、好色の女と冷たく見てしまう。

(生徒の感想の(㉓)と(㉔))この見方は、小町伝説が、男の手によって作りだされたという推定がなりたつ。小町が美人と映ずるのは、当然のことながら男の側からの意識である。小町へのいとしきと憎しみが新たな小町像を派生してゆく。例えば好色、嬌慢、零落のイメージはいとしさの裏返しではないのか。小町の核は、美人でなければならぬというのである。(生徒の感想(㉕))これらから男生徒の



小町伝説の母胎—古今集

口感想は小町伝説を理解する上で参考になる。

十八首の歌を検討すると、恋の分類に入れていない歌は、春下の「花の色は」雑下の「わびぬれば」(938)と「あはれてふ」(939) 雑躰(俳諧)の「人に逢はむ」(1030) 墨域(物名)の「おきのゐて」(1104)となる。この

分類は、『古今集』の撰者がしたことで、これに拘泥することはない。1030と1104は、明らかに恋の情熱を歌ったものである。

1030 人に逢はむつきのなき夜は思ひおきて胸走り火に心焼けおり
1104 おきのゐて身を焼くよりもかなしきは都島辺の別れなりけり
938 も後に記すが恋の歌である。残った二首の「花の色は」「あはれてふ」も、恋歌の多さから、歌の背後に男の姿を考えて理解する方がおもしろくてわかり易い。また、おもしろくて、わかり易い方が伝説化されるといってよいだろう。

113 花の色はうつりにけりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに

939 あはれてふ言こそうたて世の中を思ひはなれぬほだしなりけれ

「花の色は」は自然が主か(上句)人事が主か(下句)ということとより、「花の色」は容色、「世」は男女の仲とすると、男性遍歴の結果として、年を経た小町、物思ひに沈む小町が見えてくる。「あはれてふ」の歌も、男がかけてくる言葉であり、この言葉が世を捨てさせぬ絆と見た方が、小町の色香へのみれんが見えてくる。生徒の感想では(㉔)にあたる。こうみると十八首は全て恋の歌になっ

てしまう。

たに違いない。古今の撰者が、恋の情趣を解した歌人として業平とともに小町を選んだ時、好色小町が生まれる因があったと言えるだろう。いわんや、文屋康秀が「任国を見に行かれませんか」と小町を誘ったのに対し、小町はこう返歌した。

938 わびぬれば身をうき草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ

思ふ

わびしく暮しているので誘う方があるなら、私（浮草）はどこへでも行こうという意味だが、この歌は、男なら誰でもついて行くという好色・放浪の小町像を広めてしまったようだ。いくら小町と康秀の仲が「内輪を知りあっている者同志のいたわりに対しての甘え心の誇張」^⑬、「冗談にまぎらわせた真実」^⑭としても、この歌を理解する側は、そんなことは理解の外であったに違いない。好色が興味をひくのである。例えば、生徒が、この歌を嫌いな歌の一位にしているのも、好色の故なのである。とくに中世の時代は嫁入婚に変わりつつあり、夫と妻は主従関係のようになってくる。妻の貞操が強制されていく時代である。『古今著聞集』や『十訓抄』の小町伝説のように、小町はこの歌を引用されて教訓的に使われ、男性遍歴の果てが、「誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ」となってしまった。小町の恋愛については窪田空穂氏は「中流貴族の女性に共通な、自由な、むしろ放縦な恋愛生活」^⑮と説いておられる。放縦な恋愛生活は、中世

の立場から言えば、好色小町^⑯、さらに遊女小町になりさがってしまったことになる。好色の小町は、しかも男性に対して冷たい仕打ちをする。

623 みるめなきわが身をうらと知らねばや離れなで海人の足たゆ

く来る

727 海人のすむ里のしるべにあらなくにうらみむとのみ人の言ふ

らむ

この二首は男性を海人にたとえたところに小町の橋慢さがでている。みるめ（海松布）うら（浦）は海人の縁語だが、「みるめなき」（容貌が悪い、逢う機会がない）と「わが身」（小町か男）をどう解釈するかで内容は全く変る。四通りに解釈できるが二例をあげよう。あなたに逢えぬ私のつらさを知らないで、いつもあなたは足を棒のようにして通ってくる。私のつらい気持ちも察してねと訳すと小町は女らしいが、容貌の悪いその顔で私のところへ通ってくるのねと訳すと、痛烈すぎて男は顔色が変わるに違いない。

「海人のすむ」は、小町が心変りしたため、男が恨みを言っているのを他人事のように冷たくつきはなし、私は男の案内者ではないのにと言うのである。しかし、実は、小町の橋慢さは小町の冷静さにひそんでいるようである。

下つ出雲寺で亡き人の法事があった日、導師の真静法師が説教し

たことを安倍清行が歌によんで、同席の小町につかわした。後の歌が小町の返歌である。

四

556 包めども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬめの涙なりけり

557 おろかなる涙ぞ袖に玉はなす我はせきあへずたぎつ瀬なれば

清行は法師の説教をふまえ、袖にたまらない白玉という経文の言葉は、人に逢えぬ時の涙だなあと詠んだ。亡き人への悲しみの涙を逢えない小町への恋の涙としたものである。機智にとんだ清行の歌だが、その中にも、ちらりと男の本心をのぞかせていると理解した小町は、清行の涙を「おろかなる涙」と規定した。そして、私の涙は激しく流れる瀬のような、心のこもったもので、あなたのような軽薄なものではありません。だから信じられませんわと軽くいなした形である。小町の方が清行の当意即妙を一步うわまわった形で、冷静に処理している。

この冷静さは、我身を客観的に眺める歌の多さに指摘できる。

「わが身時雨に」(782) 「我身世にふる」(113) 「わが身むなしく」(822)

「身をうき草の根を絶えて」(938) 「わが身をうらと」(623) が、それを裏付ける。頭の回転が早く、冷静に我身を眺めることのできる小

町の資質は、もともと嬌慢、冷酷と映ずるものを持っていたのである。先に述べた「みるめなき」(623) は、その最たるものとして喧伝され、百夜伝説につながっていくのであろう。

「わが身」として己を客観的に見る背景には、「うつろふ」としての把え方が、小町の歌を支えている。

782 今とはてわが身時雨にふりぬれば言の葉さへに移ろひにけり

797 色見えて移ろふものは世の中の人の心の花にぞありける

「今とはて」は、わが身の老いを時雨として客観的に眺めることによって、男の心変りを冷静に「移ろひにけり」と把え、「色見えて」も、男の心変りを素直に歌ったものだが、花の移ろひを言外におさえることによって、「人の心の花」、即ち、変りゆく男の心を把えている。有名な「花の色はうつりにけりな」の「うつり」も、「わが身」を客観視した上での「花の色(容色)は色あせてしまつたことだ」になる。「移ろひ」を使っていないが、「わびぬれば身をうき草」も、わが身を浮き草のようにはかないと把えている。次の歌は、男の変心にあつて、わが身は空しくなつてしまったのを秋風に託したものであるが、「わが身むなしく」を把えることによつて、「かなしけれ」になる。

822 秋風にあふ田の実こそかなしけれわが身むなしくなりぬと思

へば

つまり、これらの歌は、現実のわが身を客観視することによつて、

現実の諸相を「うつろふもの」「はかないもの」「むなしくなるもの」として小町は把えていることになる。仏教で言えば、現実の諸相は無常と捉え、その現実をよく凝視することを諦観というが、小町の「うつろふ」はそれにあたる。しかし無常観ではない。老いたわが身、空しくなったわが身を詠嘆的に把えている。「花の色は移りにけりな」「人の心の花にぞありける」の「な」や「ける」は、それを語っている。無常に徹することのできない小町の思想は、いわゆる「もののあはれ」なのである。これは『古今集』としての特徴でもある。

939 あはれてふ言こそうたて世の中を思ひはなれぬほだしなりけり

この歌は先にも述べたが、男がかけてくれる言葉が、この世を捨てさせない絆になるという意である。この歌について目崎徳衛氏は、小町の本質をついたみごとな解釈をしておられる。

『小町が嘆息しているのは、(中略) 小町自身の中に根強く潜む「もののあはれ」の心情であり、もっと端的に言えば色好みの余燼である。花の色香はすでに消えうせようとするのに、なおかつ女身の奥深く男に対して揺れ動く心が潜む。小町はそれを持て余して「うたて」と嘆いているのではないか。「罪障深く」とは、まだ彼女は明言していない。しかし「うたて」は、そうした宗教的自覚まで今一步

の所で発せられた痛嘆である。(中略) 長い恋愛遍歴の末に深まった人間凝視の帰結だけは、この痛嘆の中に如実に看取されるであろう。』
宗教的自覚の今一步の嘆きの「うたて」は、無常に徹し切れなかった人間小町の妄執である。色香への未練である。この妄執が放浪の小町を生むに至る。無常観でなく、無常哀感、無常美感というべきだろう。小町が遁世した記録はない。しかし、都から離れた山里に晩年任んでいたらしいことは、『古今集』の伝小町の歌から推定できる。

944 山里はものわびしきことこそあれ世の憂きよりは住みよかりけり

205 ひぐらしの鳴く山里の夕暮は風よりほかにとふ人もなし
この山里がどこをさすかわからない。都の小町伝説地から推定すると、市原野、山科、逢坂、井出というところになろうか。山里への遁世は小町だけでなく、中流貴族の一つのはやりのように見られる。『古今集』に憂しと云って世を捨てて人がいるが、なお憂きときはどこへ行くのか(956)という、当時の流行への皮肉を述べたものがあるくらいである。小町の遁世も先の「うたて」と同じく、中途半端なものに終わったと見るべきだろう。

五

以上のように十八首の歌から多彩な小町像がうかがわがっていく

だけに、十八首は色々な小町説話を生む母胎となった。とくに『玉造小町壮衰書』の玉造小町と小野小町との混和は（例『古今著聞集』）後の小町説話を大きく変えてしまった。

行路の次。歩道の間。徑辺、途傍に一人の女人あり。容貌は顛傾して身体は疲瘦せり

ではじまる壮衰書の女は、裸形、はだして路頭に徘徊する。

左腎に破れたる篋を懸け、右手に壊れたる筥を提ぐ。頸には一つのつみを係け、背には一の袋を負ふ

彼女の出自は倡家の子で良室の娘である。若い時、「嬌慢最も甚し」く、しかも美人であった。



壮衰書の絵画化された小野小町像
室町時代 陽明文庫蔵

朝には鸞鏡に向ひ蛾眉を点じて容貌を好くし、暮には鳳釵を取り蟬翼を畫きて艶色を理ぶ。（中略）あざやかなる面子は芙蓉の曉浪に浮べるかと疑はれ、たをやかなる腰支は楊柳の春風に乱るかと誤たる。楊貴妃の花の眼を奈ともせず、李夫人の蓮の暎を屑ともせず

このように美しい彼女のもとに多くの男性が婚姻を争ふが、父母は王宮の妃にしたいので、すべてを断る。しかし、彼女は若くして父母兄弟を亡くして一人となり、流離することになる。

壮衰書をかたんに紹介したが、以上からわかるように、美人、嬌慢、零落放浪の姿は小町とよく類似していることがわかる。しかし、十八首から推定できる小町の純粹で一途な性格、客観的、理智的な性格、好色などの点は壮衰書には描かれていないこと、内容があまりにも中国的なことから、両小町は別人であろう。

壮衰書の内容は、藤原清輔（一一〇三—一一七七）の『袋草子』巻二にすでに書かれているので、早くから知られていたらしい。川口久雄氏によれば、壮衰書の成立期と作者について、延喜期（九〇一—九二二）の唱導僧あたりの作かと言われている。唱導僧が「讚仏乗の為に」きわめて具体的に語る玉造小町の壮と衰の生き方、とくに美人零落放浪の生き方は、小町伝説の発展とともに、自然に小野小町と混和したに違いない。

そうでなくても、小町の歌に流れる「うつろひ」の思想は、無常に徹し切れなかったとは言え、詠嘆的な無常が流れている歌である。女人無常を説く壮衰書と結びつきやすい。「花の色は」の歌は、女性の壮と衰を語るにもっともふさわしい歌として、唱導僧によって活用され、説教に現実感を与えたことと思われる。

十八首の小町像が唱導僧の壮衰書と混和したことは、後の小町伝説を仏教色濃いものにした。壮衰書に流れている浄土教的な阿弥陀



小町寺蔵 小野小町の部分相図不浄

信仰は、『お伽草子』の小町草紙になると、「女は罪深くして業障の雲あつく」「妄執の深きは女人なり」として無常を説く。そして、「此物語を聞く人、まして読まん人は観音の三十三体をつくり、供養したるに等しきなり」と観音信仰と結びついた本地譚の「語り」の性格をおびてくる。謡曲の「通小町」「関寺小町」「卒都婆小町」を見て、

ワキに僧が登場する。このことは、小町伝説の作者が聖という男性の眼を通して語られてきたことを示しているだろう。

この無常で色づけられた放浪零落の小町こそ、漂泊、貴種流離好きの日本人の好みに合致したものと思われる。漂泊はたえず死と隣り合わせで、「もののあはれ」を誘うだけに無常と結びつきやすい。まして、かつての美女小町だけになおさらである。小町伝説の伝播者は、多くの漂泊者と云われている。それは遊行の聖であったり、遊行女婦（巫女・比丘尼等）であったりするが、いずれも社会の底辺に生きた卑しい人々が多い。

逆に言えば、小町伝説は小町が乞食のように零落放浪する話となつて、主として遊行女婦に受け入れられ、全国に流布したのではなかったか。巫女や比丘尼たちは、零落放浪する小町に同情と親しみを覚え、自らの人生を小町に託して新たな小町伝説を各地に伝播していくことになる。その語りは、男の側でなく、女の側としての罪障消滅の遊行にとって変わるようになるようである。

注

- ① 片桐洋一氏『小町追跡』一二七頁。
- ② 『尊卑分脈』四卷『群書類従』卷六十三。
- ③ 妥女説は、黒岩涙香氏『小野小町論』折口信夫氏『宮廷儀礼の民俗学的考察』『全集』一六。更衣説は、角田文衛氏『古代文化』一八の四。
- ④ 前田善子氏『小野小町』。横田幸哉氏『小野小町伝説研究』七六頁。

⑤ 角田文衛氏前掲書。

⑥ 『在原業平・小野小町』一六八頁。

⑦ 例えば、衣通姫と小町は境遇の類似があるという推定。 岡地文子氏

『小野小町』『人物日本の女性史』一、参照。

⑧ 生徒は、この歌を小町のうぬぼれと中年女性のひがみと把えた。美人は殆んどなかった。

⑨ 片桐洋一氏は前掲書で、恋二と恋三の二箇所に分かれているが、もとは一まとめの連作と推定されている。九六頁参照。

⑩ 秋山虔氏『王朝女流文学の形成』四二頁。

⑪ 身分が高い女性説は、小沢正夫氏『古今集』小学館。奥村恒哉氏『古今集』新潮古典集成。あはれにあたる説は、窪田章一郎『古今集』角川文庫。美女とする説は、佐伯梅友『古今集』岩波古典大系。

⑫ 『鑑賞日本古典文学』七卷。

⑬ 窪田空穂氏『古今和歌集評釈』。

⑭ 藤岡忠実、片桐洋一、増田繁夫、小町谷照彦、藤平春男の各氏によるシンポジウム日本文学『古今集』一四六頁。

⑮ もろさわようこ『おんなの歴史』上二八三～一八四。

⑯ 『和泉式部・小野小町』日本古典全書の解説。

⑰ 中世の伊勢物語の注釈書の『冷泉家流伊勢物語抄』『和歌知頭集』『愚見抄』など。伊勢物語の色好みの女に小町をあてて考えている。このことと指摘は、片桐洋一氏『小町追跡』にくわしい。

⑱ 「小町草子」『お伽草子』

⑲ 目崎徳衛氏前掲書。

⑳ 藤本一恵氏「うつろひの美」『国文学』昭四六・一二。

㉑ 前掲書。

㉒ 関谷真可嗣氏『小野小町秘考』所載による。
㉓ 『平安朝漢文学史の研究』四四三頁。